日本人大学生とトルコ人大学生の
個別外来語に対する受容意識について

TOKSOZ Levent

1．はじめに

日本語においてもトルコ語においても近年「外来語の氾濫」ということがよく話題にのぼり、両国では外来語の増加に歯止めをかけるために分かりにくい外来語の言い換えの提案が行われている（日本：国立国語研究所「外来語委員会」（2006b）等；トルコ：Ercilasun（1998）等）。

両国においては話者の外来語受容意識について様々な調査が行われてきた（文化庁（2000）、Osam（1997）等）。これらの先行研究を見ると、日本の「若い世代」では外来語受容意識が高いこと、他方、トルコ人は受容意識が低いことが分かる。

本研究で使う「外来語受容意識」とは、外来語一般の母語への受け入れに感じられる好ましさを意味する（以下「一般受容意識」とする。例えば、外来語が母語に入ることを好ましく感じ、外来語の増加を支持するような話者は「一般受容意識が高い」とする）。

直接トルコ人・日本人大学生の一般受容意識を対照させた研究として、Toksoz（2011、2012）が挙げられる。そこでは、日本人は外来語の一般受容意識が高く「機能重視型」、トルコ人は一般受容意識が低く「伝統重視型」であることが確認され、その理由として、母語とアイデンティティの関連性、また外来語表記の影響が指摘されている（Toksoz（2011））。また、両国大学生の一般受容意識を規定する要因が検討され、その結果、日本人大学生の一般受容意識には「格好良さ」、「表現豊富」、「会話親和」、「軽率さ」の４因子が影響を与えているのに対して、トルコ人大学生の一般受容意識には「伝統破壊」と「格好良さ」の２因子が影響を与えていることが分かった。外来語使用の「会話親和」因子は日本語のみで見られたが、この因子には、外来語が、相手との会話をより親しみやすく、楽しいものに感じさせるという意識が表れている。外来語のこの効果が、日本での一般受容意識を高める要因の一つとなっていると考えられる（Toksoz（2012））。

このように、日本人大学生とトルコ人大学生では一般受容意識が異なっていることが既に明らかにされている。しかし、時間的順序関係から考えると、話者が外来語というもの一般に受容意識を抱くには、まず、個別の外来語と接触する必要がある。従って、個別外来語の受容意識（以下「個別受容意識」とする）、即ち、具体的な個別の外来語について、母語への受け入れに感じられる好ましさはどのような要因から影響を受けているかを解明

することが重要である。個別受容意識には一般受容意識と個別外来語への認知度という２つの要因が関わっている可能性がある。

まず、一般受容意識が高く、外来語に肯定的な大学生は、そうではない大学生よりも、個別受容意識も高くなると予測される。日本人の外来語を使用する動機を探る熊抱（2004）は、外来語を用いる長所として、“語彙が豊富になる”、“斬新でお洒落な感じがする”等の10項目を、そして、外来語使用の短所については“日本語が乱れる”、“分かりにくい”等の５項目を挙げている。この論文を基に筆者は次の２点を予測した。日常生活で関わってきた外来語のことを全体的に考えた時、外来語の良い点の方が印象深ければ、“一般受容意識の高い”派に、また悪い点が印象深ければ“外来語受容意識の低い”派になりやすいこと、また、個別の外来語と接した際、自分が持っている一般受容意識に沿って反応していることである。

個別受容意識に影響を与えるもう一つの要因として、その語の意味が分かるか否か等、個別外来語への認知度が考えられる。文化庁（2000）の「国語に関する世論調査」の結果によると「日常の言語生活に外来語を交えることは好ましくない」と感じる理由の中で「外来語や外国語が分かりにくいから」というのが64.2％で最も多く、これは語の理解度と一般受容意識の関係を表しているように思われる。使用率が高い語は話者にとって馴染み深く、日本語に定着している点で個別受容意識が高くなりやすいことが予測される。

そこで、本研究は、日本人大学生とトルコ人大学生を対象に、個別外来語の受容意識、即ち、その語の母語への受け入れに感じられる好ましさが、話者の外来語一般に対する受容意識の高低、または、その個別外来語の使用率によってどう異なるかを探ることを目的とする。

２．外来語の社会言語学研究における本稿の位置づけ

陣内（2007）によれば、外来語の社会言語学的研究は以下の３つに分類するのが有効である。日本とトルコの外来語の現状を把握するために、両国で社会言語学の分野で外来語について行われてきた先行研究を陣内（2007）の分類に従って紹介する。

Ⅰ.【言語要素からみた外来語研究】

個別の外来語そのものを対象とした研究であり､外来語研究の大部分がここに含まれる。語源の問題、外国語から借用される際の音形・語形あるいは意味用法や外来語の量的推移を扱う大量語彙調査もここに入る（日本：国立国語研究所（1962－64）等；トルコ：Vural＆Böler（2008）等)。

外来語の量に関して、両国の調査結果を直接比較するのは困難であるが、言語生活の面では外来語はトルコ語より日本語の方が深く浸透しているように思われる。例えば、日本

では、石綿（2001：18）は約50年前に国立国語研究所の行った「雑誌90種の用語用字調査」から、当時の外来語の異なり語数は全体のおよそ１割であると述べている。他方、トルコでは、Vural＆Böler（2008：61）によると、『トルコ国語大辞典』の2005年版において、外来語の数量は見出し語全体の6.65％に相当するものであり、「外来語の氾濫」という議論は最初から正当ではないと指摘されている。

Ⅱ.【言語運用からみた外来語研究】

この研究法は、言葉の使用者である人間が中心に捉えられ、外来語が人の心にどのように作用するのか探られる。語種によるイメージの違いや使い分け、表現の効果等がここに含まれる（日本：文化庁（2000）、熊抱（2004）等；トルコ：Osam（1997）、König＆Somuncu（1993）等）。

これらの先行研究からは、日本人大学生は外来語受容意識が高く、外来語に肯定的であること（文化庁（2000））が、他方、トルコ人大学生は外来語受容意識が低く、外来語に否定的であること（Osam（1997））、外来語によってトルコ語の伝統が破壊されるという意識が強いこと（König & Somuncu（1993））が指摘されている。

Ⅲ.【言語社会から見た外来語研究】

外来語が果たしている「社会機能」に関わる研究である。陣内は、Ⅱ.【言語運用からみた外来語研究】は、対人的コミュニケーションを中心としたミクロで心理的なものを対象としているのに対し、この分野の研究は、発信者と社会集団とのコミュニケーションというマクロ的な研究であるとして両者を区別している。官公庁や自治体から発信される公共性の高い外来語に関する調査、マスメディアを対象とする研究、外来語の言い換えマニュアル作成などが、このグループに入る（日本：国立国語研究所「外来語委員会」(2003a)、(2003b)、(2004)、(2006a)、(2006b)；トルコ：Ercilasun（1998）等）。

以上、陣内（2007）に従い、外来語の社会言語学的研究を３つに分類し、それぞれの分類に関して、日本とトルコで蓄積されてきた先行研究の成果を紹介した。両国の外来語の現状を以下の３点にまとめておきたい。

⑴　外来語の数量に関しては、トルコ語より日本語の方が多く、言語生活の面で深く浸透しているように思われる。

⑵　日本人大学生は、一般受容意識が高く、外来語に肯定的であること、一方、トルコ人大学生は、一般受容意識が低く、外来語に否定的であり、外来語によってトルコ語の伝統が破壊されるという意識が強いことが指摘されている。

⑶　両国で外来語の増加に対して言語政策が取られ、言い換えマニュアル作成など、分かりにくい外来語の言い換え提案が行われている。

上記のように、日本とトルコには、外来語の増加に歯止めをかけるために、外来語に対して言い換えのような言語政策が行われてきたという共通点と、話者が外来語に示す好ましさの態度が正反対であるという相違点があることが感じられる。

本研究は、日本人大学生とトルコ人大学生を対象に、個別外来語の受容意識、即ち、その語の母語への受け入れに感じられる好ましさが、話者の外来語一般に対する受容意識の高低、または、その個別外来語の使用率によってどう異なるかを探ることを目的とする。従って、本研究は、陣内（2007）の分類に従えば、主にⅡ.【言語運用からみた外来語研究】の枠組みに入る。

3．調査概要

3.1　調査協力者

広島大学に在籍する日本人大学生112名（男性：49名、女性：63名、平均年齢：20.4歳、標準偏差：1.2)、そして、チャナッカレ大学に在籍するトルコ人大学生64名（男性：20名、女性：44名、平均年齢：21.3歳、標準偏差：1.7)、合計176名を対象に、質問紙による調査を実施した（調査期間は2010年11月～2011年４月)。

3.2　質問紙の構成

質問紙はⅰ．一般受容意識に関するもの、ⅱ．個別外来語の使用率に関するもの、ⅲ．個別受容意識に関するものの、３つのセクションから成っている。

ⅰ．一般受容意識に関するものでは、日本人およびトルコ人の大学生が、外来語の母語への流入をどの程度好ましく評価しているかを探るために、Osam（1997）を参考に、３項目を設定した（「外来語が日本語／トルコ語に入ることは好ましい」、「外来語がこれから増えても危機感を覚えない」、「外来語の日本語／トルコ語への貢献は与える被害よりも大きい」)。

ⅱ．個別外来語の使用率に関するものでは、日本語とトルコ語で、それぞれ25語の個別外来語について、使用したことがあるか否かを尋ねた。

日本で実施された調査では、国立国語研究所の「外来語定着度調査」から選択した25語の外来語を、一方、トルコで実施された調査では、TDK（トルコ言語協会）の「外来語辞書」から選択した25語の外来語を使用した。本研究で使用された外来語は以下の通りである。

日本：「コア」、「フォローアップ」、「ドクトリン」、「インサイダー」、「アセスメント」、「コンセンサス」、「アカウンタビリティー」、「インキュベーション」、「セクター」、「ライフライン」、「サポート」、「コミュニケ」、「アグレッシブ」、「テーマ」、「コラボレーション」、「デリバリ」、「デフォルト」、「ハーモナイゼーション」、「フレ

ームワーク」、「アナリスト」、「インパクト」、「グローバル」、「イベント」、「リアルタイム」、「プレゼンテーション」

トルコ：*agresif*（「アグレッシブ」）、*elit*（「エリート」）、*handikap*（「ハンディキャップ」）、*fenomen*（「現象」）、*data*（「データ」）、*konsensüs*（「コンセンサス」）、*kompozitör*（「作曲家」）、*motivasyon*（「モチベーション」）、*izolasyon*（「イゾレーション」、*alternatif*（「交互の」）、*palyatif*（「姑息な手段」）、*asparagas*（「扇情的なジャーナリズム」）、*proses*（「プロセス」）、*dipfiriz*（「冷凍機」）、*antipatik*（「反感を持った」）、*analist*（「アナリスト」）、*versiyon*（「バージョン」）、*pesimist*（「ペシミスト」）、*bibliyografi*（「文献」）、*detay*（「ディテール」）、*trend*（「トレンド」）、*global*（「グローバル」）、*defans*（「ディフェンス」）、*prezentasyon*（「プレゼンテーション」）、*prestij*（「プレステージ」）

ⅲ．個別受容意識に関するものでは、ⅱ．で使用された25語の個別外来語に対する、日本人大学生・トルコ人大学生の受容意識を探り、対象とされたそれぞれの外来語について、「これらの語が日本語／トルコ語に入ったことについて好ましいと思うか」について、「そう思わない」、「あまりそう思わない」、「どちらとも言えない」、「ややそう思う」、「非常にそう思う」の５段階で回答を求めた。

3.3　方　法

日本人大学生とトルコ人大学生の個別受容意識に対して、大学生の一般受容意識の高低、あるいは個別外来語の使用率が影響を与えているのか否かを探るために、以下のような方法を取った。

まず、大学生を一般受容意識によって群分けした。ⅰ．で使用された３項目の平均値を算出し、平均値に±.５標準偏差を付け加えることによって、調査協力者を一般受容意識が低い群と一般受容意識が高い群に分けた。

また、上記の２つの群それぞれについて、25語の外来語をその使用率によって分類した。国立国語研究所「外来語委員会」（2006b）を参考に、使用率が25％未満の語を使用率が「極めて低い」語、25％以上50％未満の語を使用率が「低い」語、50％以上75％未満の語を使用率が「高い」語、75％以上の語を使用率が「極めて高い」語とした。

最後に、個別受容意識、即ち、その語の母語への受け入れに感じられる好ましさが、その人の一般受容意識の高低、あるいは、対象語の使用率から影響を受けているかどうかを検討するために、個別受容意識を従属変数、一般受容意識と対象語の使用率を独立変数とした２×４の２要因分散分析を行った（第１要因は一般受容意識：「高い」、「低い」（被験者間要因）、第２要因は対象語の使用率：「極めて高い」、「高い」、「低い」、「極めて低い」（被験者内要因））。

４．分析結果

以下、4.1では、日本人大学生における個別受容意識を、4.2では、トルコ人大学生における個別受容意識を検討する。

4.1　日本人大学生における個別受容意識

4.1.1　一般受容意識による群分け

日本人大学生の一般受容意識を測る３項目（「外来語が日本語に入ることは好ましい」、「外来語がこれから増えても危機感を覚えない」、「外来語の日本語への貢献は与える被害よりも大きい」）の平均値（3.34）に±.５標準偏差を付け加え、平均値が2.96以下の29名を一般受容意識が低い群、そして、3.72以上の29名を一般受容意識が高い群とした。

4.1.2　日本語における対象外来語の使用率

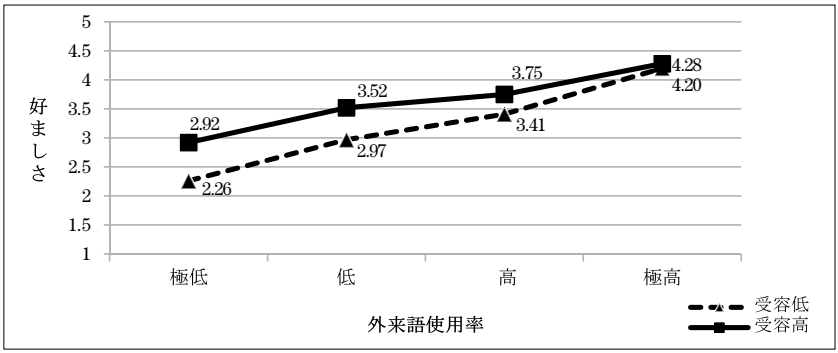
日本語で対象とされた25語の外来語を、使用率によって以下の４グループに分けた。それらのグループは、上記の２つの意識群で異なることはなかった。

使用率が「極めて高い」語：「インパクト」、「イベント」、「テーマ」、「サポート」、「グローバル」、「プレゼンテーション」、「コラボレーション」、「リアルタイム」、「アグレッシブ」（９語）
使用率が「高い」語：「デリバリ」、「ライフライン」、「コア」（３語）
使用率が「低い」語：「デフォルト」、「コミュニケ」、「アセスメント」、「セクター」（４語）
使用率が「極めて低い」語：「アナリスト」、「インサイダー」、「ハーモナイゼーション」、「フレームワーク」、「コンセンサス」、「ドクトリン」、「フォローアップ」、「アカウンタビリティー」、「インキュベーション」（９語）

4.1.3　日本人大学生の個別受容意識

日本人大学生の個別受容意識が、話者の一般受容意識、そして対象語の使用率から影響を受けているかどうか検討するために、個別受容意識、即ち、その語の母語への受け入れに感じられる好ましさを従属変数、一般受容意識と対象語の使用率を独立変数とした２×４の２要因分散分析を行った。【図１】は、日本人大学生の一般受容意識の高い群と低い群について、語の使用率の各水準における個別受容意識の評価を図示したものである。

分散分析の結果、日本では、個別受容意識に関して、一般受容意識の主効果（$F(1,56)=609.13$, $p<.05$）、使用率の主効果（$F(3,168)=87.72$, $p<.001$）、一般受容意識と使用率の交互作用（$F(3,168)=3.12$, $p<.05$）がいずれも有意であり、下位検定の結果、一般受容意識が高い群と低い群の間では、使用率が「高い」語（$F(1,224)=2.73$, *n.s.*）と使



【図１】日本人大学生の一般受容意識と語の使用率による個別受容意識の評価

用率が「極めて高い」語（$F(1,224)=0.12$, *n.s.*）では有意差が見られなかった。外来語一般に対して「機能重視型」である日本人大学生の場合、使用率の「高い」語、「極めて高い」語に対しては、一般受容意識の高低に関わらず、大学生は同程度の好ましさを感じている。また、外来語の使用率に関して、一般受容意識の低い大学生の場合、各水準で有意差が確認され、彼らは、語の使用率には敏感に反応していることが分かった。それに対して、一般受容意識の高い大学生の場合、使用率が「低い」語と「高い」語の間では有意差が認められず、好ましさを同程度に評価していることになる。

4.1.4　考察とまとめ

以上、4.1では、日本人大学生の個別受容意識が、一般受容意識の高低、そして語の使用率によって異なるかどうかを検討したが、分析の結果、次のようなことが分かった。

まず、日本では、使用率が高い外来語ほど、その語の日本語への流入は好ましく評価されている。つまり、日本人大学生は、馴染みがあり、自分でも使用する外来語には抵抗感を覚えていない。しかし、語の使用率の個別受容意識への影響は、一般受容意識が低い群では各水準で有意であるのに対し、一般受容意識が高い群の場合、使用率が「低い」語と「高い」語では有意ではない。これは、日本では、一般受容意識が低く、元々外来語に否定的である大学生は、語の使用率により敏感に反応していることを意味する。一方、一般受容意識が高く、元々外来語に肯定的な姿勢を持つ大学生は、使用率が「低い」語、そして、「高い」語を好ましさの面で区別せず、同様に見なしていると言える。一般受容意識が低い群が使用率に敏感に反応することは、既に頻繁に使用している語は「まあ便利である」、「その外来語はあってもよい」等、ある程度肯定的に評価しているが、使用しない語に関しては、元々意識が低く、評価も否定的であるということになる。この群の大学生の個別受容意識には、その外来語はどれくらい使われているかということが非常に直接的に影響していると考えられる。他方、一般受容意識の高い群は、元々外来語一般に肯定的な

意識を持っており、対象語があまり使用されていないものであっても、比較的高頻度で使用されているものであっても、個別受容意識の点では同程度に評価している。このグループの人も使用率が「極めて高い」語と「極めて低い」語には評価が分かれるが、一応使用されている語（即ち、使用率が25％から75％までの語）には特段否定的な態度を示さないと言えよう。

また、一般受容意識の高低に拘わらず、使用率が「高い」語と、「極めて高い」語では、２つの群で共に高く評価されていることは注意を要する。一般受容意識が低い大学生は、まだ定着度が進んでいない、使用率が「極めて低い」語（「アナリスト」等）そして、使用率が「低い」語（「デフォルト」等）には、抵抗感を感じ、一般受容意識が高い大学生よりは個別受容意識が低くなっている。しかし、使用率が「高い」語（「デリバリ」等）や、「極めて高い」語（「インパクト」等）には、両群の間の差がなくなる。これら両グループの外来語はいずれも一般的に馴染みが深い語であり、コミュニケーション上意味がよく了解されている外来語である。外来語に元々否定的である一般受容意識が低い群もこれらの外来語の機能を認め、一般受容意識が高い群と同じ程度に高く評価しているものと思われる。

4.2　トルコ人大学生における個別受容意識

4.2.1　一般受容意識による群分け

トルコ人大学生を対象に一般受容意識を測る３項目（「外来語がトルコ語に入ることは好ましい」、「外来語がこれから増えても危機感を覚えない」、「外来語のトルコ語への貢献は与える被害よりも大きい」）の平均値（2.59）に±.５標準偏差を付け加え、平均値が2.23以下の16名を一般受容意識が低い群、2.95以上の26名を一般受容意識が高い群とした。

4.2.2　トルコ語における対象外来語の使用率

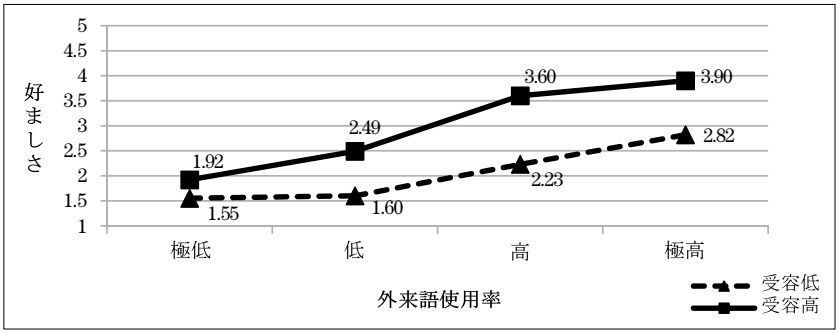
トルコ語で対象とされた25語の外来語を使用率によって以下の４グループに分けた。

使用率が「極めて高い」語：*motivasyon*（「モチベーション」）、*agresif*（「アグレッシブ」）、*detay*（「ディテール」）、*alternatif*（「交互の」）、*prestij*（「プレステージ」）、*global*（「グローバル」）（６語）
使用率が「高い」語：*antipatik*（「反感を持った」）、*versiyon*（「バージョン」）、*izolasyon*（「イゾレーション」）、*defans*（「ディフェンス」）、*elit*（「エリート」）（５語）
使用率が「低い」語：*data*（「データ」）、*pesimist*（「ペシミスト」）、*asparagas*（「扇情的なジャーナリズム」）、*handikap*（「ハンディキャップ」）、*analist*（「アナリスト」）（５語）
使用率が「極めて低い」語：*palyatif*（「姑息な手段」）、*konsensüs*（「コンセンサス」）、*kompozitör*（「作曲家」）、*prezentasyon*（「プレゼンテーション」）、*proses*（「プロセス」）、*bibliyografi*（「文献」）（６語）

ただし、*trend*（「トレンド」）、*dipfiriz*（「冷凍機」）、*fenomen*（「現象」）の３語の使用率に関しては、一般受容意識が低い群と高い群の間では差が見られ、これらの３語は、一般受容意識が低い群では使用率が「高い」語に、一般受容意識が高い群では使用率が「極めて高い」語に分類されていたので、分析から除外することにした。

4.2.3　トルコ人大学生の個別受容意識

トルコ人大学生の個別受容意識が、話者の一般受容意識、そして対象語の使用率から影響を受けているのかどうか検討するために、個別受容意識、即ち、その語の母語への受け入れに感じられる好ましさを従属変数、一般受容意識と対象語の使用率を独立変数とした２×４の２要因分散分析を行った。【図２】は、トルコ人大学生の一般受容意識の高い群と低い群について、語の使用率の各水準における個別受容意識の評価を図示したものである。



【図２】トルコ人大学生の一般受容意識と語の使用率による個別受容意識の評価

分散分析の結果、トルコでは、個別受容意識に関して、一般受容意識の主効果（$F(1,40)=17.72$, $p<.001$）、使用率の主効果（$F(3,120)=60.63$, $p<.001$）、一般受容意識と使用率の交互作用（$F(3,120)=4.63$, $p<.001$）が、日本の場合と同じくいずれも有意であり、下位検定の結果、一般受容意識が高い群と低い群の間では、使用率が「極めて低い」語においてのみ有意差が認められなかった（$F(1,160)=1.79$, *n.s.*）。外来語一般に対して「伝統重視型」であるトルコ人大学生の場合、一般受容意識の高低に拘わらず、使用率が「極めて低い」語については、一貫して「好ましくない」と評価している。また、一般受容意識の低い大学生にとっては、使用率の「極めて低い」語と「低い」語との好ましさの評価が同程度に低く、一方、一般受容意識の高い大学生にとっては、使用率の「高い」語と「極めて高い」語との好ましさの評価が同程度に高い。

4.2.4　考察とまとめ

以上、4.2では、トルコ人大学生の個別受容意識は、一般受容意識の高低、そして語の

使用率によって異なるかどうかを検討した。分析の結果、次のようなことが分かった。

まず、トルコでは、よく使用される外来語ほど個別受容意識が高く、その語のトルコ語への借用はより好ましく感じられている。しかし、語の使用率の個別受容意識への影響を詳細に見ると、一般受容意識が低い群は、語の使用率の低さを重要視していることが分かる。即ち、*palyatif*（「姑息な手段」）のような使用率が「極めて低い」語であれ、*data*（「データ」）のような使用率が「低い」語であれ、これらの外来語は「まだ頻繁に使用されていない」と評価され、従って、個別容意識が非常に低くなっていると考えられる。その一方で、一般受容意識が高い群は、語の使用率の高さを重要視していると言えよう。*antipatik*（「反感を持った」）のような使用率が「高い語」であれ、*motivasyon*（「モチベーション」）のような使用率が「極めて高い」語であれ、これらの外来語は「使用されている」と評価され、従って、個別受容意識が同じ程度高くなっているのではなかろうか。

そして、トルコでは、一般受容意識の高低に拘わらず、使用率が「極めて低い」語に対して非常に否定的に反応され、好ましくないと評価される。「伝統重視型」であるトルコ人大学生にとって、*palyatif*（「姑息な手段」）のような、まだトルコ語に定着していない外来語はトルコ語の伝統を破壊させる元凶と見なされていると考えられる。しかし、定着がある程度進むと、両群の個別受容意識の違いが顕著になる。

5．総合的考察とまとめ

以上、本稿では、日本人大学生およびトルコ人大学生を対象に、個別受容意識、即ち、個別外来語の母語への受け入れに感じられる好ましさが、話者の一般受容意識の高低、あるいは、その個別外来語の使用率によってどう異なるかを探った。

調査の結果、以下の２点を主張したい。

まず一点目として、日本でもトルコでも、使用率が「高い」外来語ほど個別受容意識が高くなっていることが分かる。しかし、日本では、語の使用率に関しては、一般受容意識が低い大学生は各水準に敏感に反応しているのに対して、一般受容意識が高い大学生は、使用率が「低い」語と「高い」語を好ましさの点で区別していない。一方、トルコでは、一般受容意識が低い大学生の場合、使用率が「極めて低い」語と「低い」語が、また、一般受容意識が高い大学生の場合、使用率が「高い」語と「極めて高い」語が好ましさの点で区別されていない。

そして、二点目としては、日本でもトルコでも、一般受容意識が低い大学生は、それが高い大学生よりも、個別受容意識が低いということが浮かび上がってくる。しかし、日本では、一般受容意識の高低に拘わらず、使用率の「高い」および「極めて高い」語に対しては、一貫して肯定的な姿勢が示される。一方、トルコでは、一般受容意識の影響が見られなかったのは、使用率が「極めて低い」語のみであり、このグループの語の受け入れは

トルコ人の大学生に一貫して好ましくないと評価されている。

それでは、両国の調査から得られた結果をどのように解釈すべきであろうか。

一点目については、外来語一般に対する自己意識が関わっている可能性がある。国立国語研究所「外来語委員会」(2006b) は、日本において外来語の増加に示される反応を世代別に調査した。その結果、30歳代までの若者層は増加支持派であり、40歳代以上の高年層は増加反対派であることが示された。また、同調査では、外来語・略語に対する自己意識にも世代の違いが見られ、高年層の方が、自分は「外来語・略語を知らず、使わない方であり、意味が分からず困った経験がある」と自認しているという結果が示された。

このことから考えられることは、同じ若者層の大学生でも、一般受容意識が低い群は、外来語に関して、前述の高年層と似たような自己意識を持っている可能性があるということである。そのために、日本では、一般受容意識が低い大学生の方が、その語の意味が分かるか、どれほど使用しているか等、語の使用率により敏感に反応していると考えられる。

それに対して、外来語に否定的であることが指摘されてきたトルコでは、一般受容意識が高い大学生とそれが低い大学生の意識の違いがはっきり見られる。一般受容意識が低い大学生にとっては、語の使用率の低さが重要視されており、使用率が「極めて低い」語であれ「低い語」であれ、「未だ頻繁に使用されていない」と評価されているようである。従って、いずれの語のグループも好ましさの評価が同程度に低い。一方、一般受容意識が高い大学生にとっては、語の使用率の高さが重要視されており、使用率が「高い」語であれ、「極めて高い」語であれ、「頻繁に使用されている」と意識されていると考えられる。従って、いずれの語のグループも好ましさの評価が同程度に高い。

次に、二点目については、Toksoz ((2011)、(2012)) の結果を踏まえる必要がある。これらの研究では、日本人の大学生は一般受容意識が高く、「機能重視型」であり、また、彼らの一般受容意識には「格好良さ」、「表現豊富」、「会話親和」、「軽率さ」の 4 因子が影響を与えていることが指摘されている。一方、トルコ人は、一般受容意識が低く「伝統重視型」であること、また、彼らの一般受容意識には「伝統破壊」と「格好良さ」の 2 因子が影響を与えていることが指摘されている。

今回の調査では、日本人の場合、一般受容意識が高い大学生とそれが低い大学生の間では、使用率が「高い」語と「極めて高い」語では、好ましさに関しては有意差がなかった。日本人の大学生にとって、デリバリ、インパクト等のような日本語に定着している語は「軽率さ」を与えることはなく、「格好良さ」、「表現豊富」、「会話親和」のような因子と結びつきやすいと考えられる。「機能重視型」である日本人の大学生は、一般受容意識が高い群だけではなく、一般受容意識が低い群までこれらの語を高く評価するようになっている。

一方、「伝統重視型」であるトルコ人の大学生にとって、*palyatif*（「姑息な手段」）、*konsensüs*（「コンセンサス」）のような使用率が「極めて低い」語は意味が不透明で、トルコ語の伝統を破壊させるような語であり、一般受容意識が低い大学生だけではなく、一

般受容意識が高い大学生からも低く評価されている。しかし、語の使用率が高くなると共に一般受容意識の影響が現れるようになる。

以上、本稿では日本人とトルコ人の大学生を対象に、個別外来語の受容意識が話者の外来語一般に対する受容意識の高低、または、その個別外来語の使用率によってどう異なるか探った。

その結果、「機能重視型」である日本では、定着している外来語に関しては肯定的であること、一般受容意識が低い大学生の方が、語の使用率に対してより敏感に反応していることが分かった。そして、「伝統重視型」のトルコでは、トルコ語に入った初段階では外来語に否定的であること、一般受容意識が低い大学生は、語の使用率の低さを、一般受容意識が高い大学生は語の使用率の高さを過大に意識していることが明らかになった。

本研究では、外来語の使用率に着目したが、今後、個別外来語の与えるイメージ（格好良さ、改まり度、分かり易さ等）をも視野に入れ、両国で個別外来語に抱かれるイメージをより詳細に探る予定である。

参考文献

石綿敏雄（2001）『外来語の総合的研究』岩場新書

熊抱ゆかり（2004）「カタカナ語の氾濫とその使用に於ける深層心理」『福岡大学人文論叢』35D pp. 1731-1744.

陣内正敬（2007）『外来語の社会言語学 ― 日本語のグローカルな考え方 ―』世界思想社

国立国語研究所（1962-64）『現代雑誌十種の用語用字』秀英出版

国立国語研究所「外来語委員会」（2003a）『第１回「外来語」言い換え提案』国立国語研究所

―― （2003b）『第２回「外来語」言い換え提案』国立国語研究所

―― （2004）『第３回「外来語」言い換え提案』国立国語研究所

―― （2006a）『第４回「外来語」言い換え提案』国立国語研究所

―― （2006b）『分かりやすく伝える外来語言い換え手引き』ぎょうせい

TOKSOZ, Levent（2011a）「トルコ語および日本語における外来語をめぐる意識に関する対照研究」『ニダバ』西日本言語学会（編）40　pp. 20-28.

TOKSOZ, Levent（2011b）「日本人とトルコ人大学生の個別外来語に対する受容意意識について」『日本言語学会第143回大会予稿集』pp. 450-455.

TOKSOZ, Levent（2012）「日本語およびトルコ語における外来語の効果意識を構成する因子と受容意識との関連性」『ニダバ』西日本言語学会（編）41　pp. 1-10.

文化庁（2000）『国語に関する世論調査　平成12年１月調査』大蔵省印刷局

ERCİLASUN, Bican（1998）*Yabanci Kelimelere Karşılıklar*. Ankara：T. D. K.

KÖNİG, Güray＆Somuncu, İnci（1993）Üniversite Öğrencilerinin Anadillerine ve Yabancı Dillere İlişkin Tutumları Üzerine Toplumbilimsel bir Araştırma. *Anakara Üniversitesi Dil ve Tarih Coğrafya Fakültesi Yayınları*, 37, 11-42.

OSAM, Necdet（1997）*The Attitude of Turkish People Towards the Use of Foreign Words In a*

Turkish Context (Doctoral dissertation). Hacettepe University, Institute of Social Science, Turkey.
VURAL, Hanifi＆BÖLER, Tuncay (2008) The West Origin Words Based On Turkish Dictionary (TDK) Since 1944 To 2005. *A. Ü. Türkiyat Araştırmaları Enstitüsü Dergisi*, 36, pp. 49-63.
TÜRK DİL KURUMU (2007) *Türkçede Batı Kökenli Kelimeler Sözlüğü* 〈http://tdkterim.gov.tr/bati/〉

〔付　記〕

本論文の一部は日本言語学会第143回大会において報告した。

― トクソズ・レベント、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学 ―

国文学攷投稿規定

一、本誌は広島大学国語国文学会の機関誌として、学会員からの投稿を常時募集します。
一、投稿論文の採否は、当学会役員より選出された編集委員によって構成される編集委員会で決定します。
一、採否についてのお問い合わせには一切応じません。
一、投稿論文は400字詰原稿用紙40枚以内を原則とします。
一、投稿論文の末尾に氏名のふりがな・所属を明記してください。
一、ワープロ原稿での投稿の際には、縦書きの場合は30字×21行、横書きの場合は40字×35行の書式を使用してください。
一、編集の都合上、なるべくフロッピーでの投稿をお願いします。その際、使用の機種・ソフト名を明記してください。ただし、必ずプリントアウトした原稿の同封をお願いします。
一、論文掲載の場合、本誌３部と抜き刷り30部を贈呈します。余分に必要な場合は、あらかじめお申し出があれば、実費でお頒ちします。
一、本誌に掲載された論文等の著作権は、著者に帰属します。ただし、当学会は本誌に掲載された論文等を電子化し、公開することができるものとします。
一、投稿論文の送り先 〒739-8522 東広島市鏡山１－２－３
広島大学大学院文学研究科内
広島大学国語国文学会事務局